
僕の好きな人

所有蛇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の好きな人

【NNコード】

N8733C

【作者名】

所有蛇

【あらすじ】

三人の女の子と僕のラブ「めっぽいお話です

あいさじ（前書き）

えへ、前作を読んでくださっていた皆様、申し訳ありませんでした。ちょっとしたトラブルでもう一度一話毎と部分部分を変えて投稿していくのでよろしくお願いします。

そして、これから読んでくださる皆様は楽しんでいただけると嬉しいです。

あらすじ

僕には好きな人がいる。

一人目は成績優秀、学校でも一番モテる、そしてスポーツもできる、そんな凄い人だ。

二人目は少し内気で運動は駄目だけど優しい心を持っている。

そして三人目、彼女は僕の幼馴染みである、財閥の娘さんでもありモデルでもある、今は引っ越してしまつて何処にいるかは分からな
いがとても明るい娘だった。

そんな素晴らしい女の子達に対して僕は成績も普通だし、顔も酷く
はないが良くはない、何よりチビで喧嘩あまり好まない、そんな
内気な僕と彼女達のお話です。

第一話

今日は大切な日だ。

新学期、それは誰と一緒になるかがわかる大切な日だ。

今日、僕は中学二年生になる。

「今年は誰と一緒になるかな」

下駄箱の所にクラスわけが書いてあるはずなので見に行く。

「最悪だ、なぜ涼杉さんと同じクラスじゃないんだ」

と絶望するもの有り。

「よつし、涼杉さんと同じクラスだ」と喜ぶもの有り。

そう、どこの学校にも必ずいるアイドル的存在、それが涼杉 空さん。

学校の男子のほとんどが惚れている。

まあ僕もその一人だが…。

彼女は女子にも人気があり女の子からも告白されたことがあるとか

…。

今まで男子六十七人女子四人が告白したが、彼女は七十一回^{そひ}めんなさいと答えた。

クラス表に自分の名前を見つけ何組か確認し自分のクラスに向かう。

そんな時に校門にリムジンが止まる。

運転手がドアの方にまわりドアを開ける。

「うわ、すげえ車」

「そんなことより、凄く可愛いない?」

などと言つ話しが聞えてくるほど可愛いらしい少女は校舎を見る。

「エリが白夜が通う学校ね」

自分の教室に入ると知っている顔がちらほらと見えた。
その中に涼杉さんを見つけた

「また同じクラスだね、涼杉さん、またよろしく」

「あ、月裏君、よろしく。前のクラスの時は話したかつたけどあんまり話せなかつたね、でも今度からは見掛けたら声かけてね？」

「あ、うん、分かった、涼杉さんも声かけてね」

嬉しい申し出に承諾する。

「あ、涼杉さん、俺も声かけるから声かけてね」

「抜け駆けすんなよ、俺にも声かけてね」

俺にも、俺にも、と群がつて来て危なく潰されそうになつた。

「あの、、月裏君、、また一緒のクラスだね、その、よ、よろしくおどおどと話し掛けてくる、こんな話方をするのは、

「うん、よろしくね、海さん」

彼女は海 美咲みさきさん、僕以外の男子とはあまり話さない少し内気な人。

内気な所が守つてあげたくていいと好きになる奴も多い。

「涼杉さんは相変わらず人気だね」

「うん、海さんも相変わらず人気で」

後ろでチラチラ海さんを見ている男共を見ながら言つ。

「え？ それってどういう意味？」

と海さんと話しているとドアが開き先生が入つて來た。

「はい、席について。えーと、さっそくだけど転校生を紹介します。
入つて来て」

第一話

転校生か。

新学期に合わせて転校してくるのはよくある話だ。
どんな人なんだろう。

「入つて来なさい」

先生が転校生を呼んだ。

ガラツ、という音がしてドアが開く。

皆が一斉にそちらを向き動きが止まった。

物凄く綺麗なのだ。

皆が

「あんな美少女初めて見た」

とか

「涼杉さんといい勝負じゃない？」

などと言っている。

しかし、白夜には、白夜にだけは見覚えがあった。綺麗な髪に整った顔、小さい頃よく遊んだ仲なのだ。

「初めてまして、天上 美菜です。よろしく」

ニコッと笑う。

男子がはう、とか言つて倒れる

「モデルもやつてるので時々来れないかも知れないけど仲良くなれ」と、言つた。

「モデルだつて」

「だから綺麗なんだ」

と言つ話が聞こえて来た。

そんな中、美菜が教室を見回していると白夜と田があつた。

「白夜久しぶりね」

皆の前で大声で僕の名前を呼ぶ。「み、美菜?なんでここにいるの

? 戻つて来れないって言つてなかつた?」

意味が分からない。

「なんだ月裏知り合いか、なら天上の席は月裏の隣りでいいな」

担任がそんなことを言つ。

「そんな、ちょっと」

反対しようとしたが、

「それじゃ、HRは終わり、しつかりと授業を受けるよ!」

と僕の話も聞かず先生は出ていってしまった。

その後結局授業が始まったので、美菜への質問が途中になつていて、一時間目が終わるとすぐに美菜に質問した。

「なんでこっちにいるの? おじさん達は一緒に帰つてくるの?」

「何よ、いきなり帰つて来て驚かそうと思つてたのに、なんでこっちにいるのつて帰つて来ちゃ駄目だつた?」

「そうじやないよ、いきなりだつたから驚いただけ」

「そう、ならないけど、私今日から白夜の家と一緒に住むから」

「え――」

僕よりも先に周りで聞き耳をたてていた、クラスメートが叫んだ。

「何で月裏くんの家に住むの? まさか許嫁とか」

「月裏どうじうことだ! 何でお前がこんな可愛いこと一緒に暮らすんだよ!」

白夜は男子に美菜は女子に言つよられた、その後ろで海と涼杉は浮かない顔をしていた。

とりあえず、周りは置いといて美菜への質問を再開する

「な、なんで美菜が僕ん家に住むの? おじさん達は?」

「お父さん達は来てないわ、お父さん達とは別々に暮らすって事になつたから」

「だからつてなんで僕の家なのさ、一人暮らしでもいいだろ!」

「だつて、一緒に暮らした方が白夜と一緒にいられる時間が増えるじゃない」

「つ」「真直ぐな言葉に言葉を失う

「白夜に会いにお父さん達とは別々に暮らしあつと思つて来たのこそ
んな言い方ないじゃん！せつかく会いに来たのに…」

皆の冷たい目が僕に集まる

「あの、その、そつ、ただいきなりだつたから驚いただけで別に嫌
とかじやなくて」

「じゃあ、いいわね、私今日から白夜の家に住むから

「…分かつたよ」

「やつた！流石白夜話が分かる」

そんなこんなで美菜は僕の家に住むことになった。

そんな白夜達の後ろで暗い顔をした海には気付かず…。

放課後になると美菜が

「早く帰ろう。荷物も届いてるはずだしおば様達にも会いたいし
うちに住むことが決まってから美菜は上機嫌である。

そんな美菜には言いたくなかったがやつぱり言つしかない。

「母さん達はいないよ、死んじゃったんだ… 美菜が引っ越しした後交
通事故で…」

美菜の笑顔が消えて、焦った感じになる。

「じょ、冗談でしょ？」

「僕がそんな嘘つくと思つ？」

美菜の笑顔が消える。

「だから、うちで住むなら僕と一人きりになっちゃうけど美菜はそ
れでもいい？」

「私はいいけど… 白夜は大丈夫なの？ 私と一人きりで」

「さつき言つただろ？ いいんだよ、一人で暮らそう。そっちの方が
僕も淋しくないし」

「… そうだね。私がいれば白夜も淋しくないよね」

美菜は無理に笑つた。

家について美菜の荷物の整理を手伝い夕飯を作らうとすると

「あ、白夜はいいよ。私が作るから」

「え？ 美菜ご飯作れるの？」

「失礼ね！ ご飯ぐらい作れるわよ！」

と言つて出て行つた。

数分して心配で見に行つたら、けつこうつまみといつているようだ、

いい匂いがしてきた。

「あ、白夜、もうすぐ出来るからもう少し待つてて」

僕に気付いた美菜が言った。

「何かすることない？運ぶものとか」

「いいよ、私が運ぶから、白夜はテレビでも見てて」と言わされたのでニコースを見ていると…

「今日〇×市で婦女暴行事件がありました。最近多発しているので皆様御気をつけください」

「×市って言つたら近くじょん」

「最近この辺りで強姦の事件がよくあるけど同一犯なのかな？」

調理を終えた美菜が食事を運びながら言った。

「同一犯みたいだよ、手口も一緒らしいし、被害者もこの辺りの中高生だしね」

「やだなー、早く捕まらないかな」

「警察が総動員で捜査してるらしいからすぐ捕まるよ」

「うーん、それもそうね」

美菜が作ってくれた料理も運び終えたので、いつの間にか運びこまれてきた机と椅子に座り食べ始めた。

「(ノ)馳走さまでした」

食事を終え、美菜は後片付けを始めようとした。

「いいよ美菜、僕がやるから」

「料理もしたんだから後片付けもやるわよ」

「美菜にばつかやらせちゃ悪いし、それに水仕事して美菜の手が荒れちゃつたら大変だろ？」

「そんな…綺麗な手だなんて、分かつた、後片付けは白夜に任せるわ」と頬を染めながら言った。

綺麗な手なんて言つてないんだけどな…。

美菜が僕の家に泊まっているのは朝にはもう学校中に広がっている
ようで僕と美菜を見てヒソヒソと話をしている。

僕が教室に入るなりクラスメートから

「新婚さんいらっしゃい」

と、某テレビ番組のセリフでからかわれた。

「先生が来るから、みんな冷やかすのはいい加減やめて席について
委員長の涼杉さんがみんなに言った。

涼杉さんの言つことを無視する者はいないのでみんなおとなしく席
に着いた。

「ありがとうございます、涼杉さん、助かったよ」

「私は自分の仕事をしただけ」

と冷たく言われてしまった。

「つ、月裏君」

席につこうとしたら海さんが話かけてきた

「ほ、本当に天上さんと一緒に住んでるの？」

潤ませた目で見上げて来る。

「うん、一応一緒に住んでるけど、それがなに？」

「一緒に住まなきゃ駄目なの？」

「駄目ってわけじゃないんだけど、美菜が僕の家じゃなきゃやだつ
て駄々こねて仕方なく」

「でも、若い男女が一つ屋根の下に一人つきつて言つのはまずく
ないですか？」

「うーん、それはそうなんだけど、美菜がいると家事は楽になるか
ら迷惑でわないしね」

と言った。

「迷惑じゃないならいいんですけど、一人つきりだからって変なこ
としちゃダメですよ」

と言つて海さんは席についた。
変な事つてなんだろ？

昼休み僕は親友の鹿賀里木 秋羅（かがりき あきら）と昼飯を食べていた、すると美菜と海さんが一緒に食べたいと入ってきた。「いやあ～、こんな美少女一人と一緒に飯が食えるなんて光栄だな」と大声で言いながら僕の背中をバンバンと叩いてきた。

「んで、由夜はどうちが本命なんだ？」

飲んでいたコーヒーを吹き出しそうになり慌てて飲み込む。

「な、何馬鹿なこと言つてんだよ！どうちが本命とかないから！」

大声で否定してしまったので周りのみんながびっくりした顔で見てくる。

「そんな大声で否定したらバレバレだぞ？」

秋羅はニヤニヤしながら言つた。

「んでも？どっちが本命だ？ん？ん？」

オヤジみたいな奴だ。

「だからどっちが本命とかないってば」「つまりどっちも狙つてるってわけか」

「…」

もう言葉もでない。

「お前つて優柔不断だな」

「なんでもうなる！お前意味わからんねえぞ」

「団星だからつてキレんなよ」

「キ、キレてないっすよ？」

「…」

みんなの視線がいたい。

「笑いのセンスねえな、お前」

「分かつてゐよそんなこと」

秋羅が急に海さんと美菜に背中をむけて僕の肩に腕をかける

「んで、天上さんとはもうキスはしたのか？それとももうやつちま

つたのか？そこそこと「じゅうなんだよ？」

嫌な友達である。

「なんことするわけねえだろ？」

「え？ してないの？」

いかにも意外そうに言つた。

「なんでそんな意外そうに言つてんだよ？」

「いや、普通ヤツちやうだらう。」こんな可愛い娘と一緒にすんでりや

当然のように言つた。

「そんな普通は知らん。てか彼女でもないのに」

「彼女になつたらやるのかよ？」

「…やらない」

「玉無し？」

「…」

玉無しかもしれない。

「冗談はさておきそろそろ授業始まるしおけようぜ！」

「そうだな」

秋羅がそう言つたので片付け始める。

「きやつ」

僕の手が海さんの手に触れた。

「い、ごめん」

「い、いえ私こそ」

僕も海さんも顔が真っ赤になつて見つめあつてくる。

海さんにいたつては上目づかいである。

「そういうラブコメはよんでやつてくれねえか？」

秋羅の声で我に戻る。

「ラブラブですな」

秋羅が言つ。

「ラブラブね」

美菜が怒つて言つ。

「ラブラブじゃなによ」

「ラブラブじゃないです」

海さんと僕のセリフが被る。

「息ぴつたり、いいカップルに成りそうだね、あ、ごめん、もうカツプルだつた?」

秋羅がニヤけて言う。

「まだ付き合つてないって!」

僕が叫んだ。

何故か海さんが顔を赤くする。

美菜は機嫌が悪そうに僕を睨みつけてくる。

「まだつてことはいつか付き合つんだな?」

秋羅がいつそう楽しそうに言う。

「言い間違えただけだよ」

その時、僕は海さんが少し哀しそうな顔をしたのに気がつかなかつた。

第五話

今日の放課後、五時に教室に来てください。

海。

そう書かれた手紙がいつの間にか机の中に入っていた。

「僕に何の用だろ？ 教室つて僕らのクラスの教室でいいんだよな？」

鈍感な主人公ですいません。

鈍感な主人公は首をひねりながら自分のクラスに向かう。

ガラツ

扉が開く音が響く誰もいない廊下。

「ごめんね、急に呼び出しちゃって」

「別にいいよ、それで僕に何の用？」

少し躊躇して、それから話出す。

「私…私月裏君のことが好きなの突然の告白。

考えもしなかつた展開に動搖する。

「え、あのその…え？ 海さんが僕のこと？」

はい、とうなずく。

「で、でも、なんで？ 僕海さんに何もしてないよ」

「何にもしてなくないよ。月裏君は私に大切なものをくれた。」

…覚えがない。

「ごめん、僕、覚えてないんだけど、海さんに何かしてあげた？」

「覚えてないかもね…あの時私は泣いていたから

ぼんやりと浮かんで来た映像。

「もういいよ、見つからないって

と、泣いている女の子と何かを一生懸命に探す僕。

あたりはもう夜と言つていいくほど暗い、草の中などほとんど見えな

い、それでも探し続ける。

もう見えなくなる、もう無理だ、女の子がそんな風にいつそう泣き出した時、僕は何かを引っ張りだした。

僕の手はハート型のペンダントを握つて女の子に近付く。それを女の子に見せる。女の子は泣き過ぎで赤くなつた目をあげて嬉しそうに微笑んだ。

ベンチに座つてありがとう、と何度も呟いて泣き出した。

泣き付かれたのか僕の肩に顔をのせて幸せそうに眠つている。

僕は女の子の親が来るまでずっと一緒にいてあげた。

そして別れ際その時の僕には死んだ親の形見の意味はよく分からず、親が死ぬ前に買つてくれた指輪をあげた。

「あの時僕がペンドントを見つけてあげた、あの娘？」

「覚えててくれたんだ」

「うん……いや、忘れてた」

「あの日から私は諦めないと学んだ。月裏君をみつけたのは中学に入つてからだけど見た時すぐ分かつた、ああ、の人だつて、だからすぐに声をかけました。」

「そういえば、中学に入つてから初めて話したのは海さんだった。
「それからすぐ告白しようと思つたんですけど、月裏君、涼杉さんのこと好きみたいだつたから……」

「それは……」

「……返事は今じゃなくていいですから、それじゃ」と言つて出て行こうとした。しかし、ドアを開けようとした時に廊下側から開いた。

そこには美菜と涼杉がいた。

あの後海さんは

「失礼します」

と言つて逃げる様にとつより逃げて帰つてしまつた。

涼杉さんは

「イチヤイチヤするのは他の場所にしてください」と言つて行つてしまつた。

美菜は

「帰りましょう」

と言つてさつさと教室をでて行つてしまつた。

そして、今美菜と一緒に帰つている。僕は何も言えず、美菜は何も言わない。

沈黙がどれほど続いたどうか。

「白夜はあるのが好きなの？」

突然美菜が僕に言った。

「いや、その好きは好きだけど、その…他にも好きな人がいるから」と美菜を見ながら言つ。

「だから、そのまだ誰が好きとかじゃなくて、その「もういいよ、分かつたから」と少し淋しそうに言つた。

夜、九時を回つた所、空は電話をかけている。

「もしもし？ 空？ どうしたの？」

「あ、美沙みさ？ あの相談があるんだけどいい？」

「いいよ、お姉さんに任せなさい」

「あのせ、今日、ある男子が女子に告白されたのを見ちゃつたんだけど、それからなんかイライラするんだけど何でかな？」

「え？ 何何、誰が誰に告白したの？」

「いいから、質問に答えてよ」

「…そうね、好きなんぢゃないのその男子のこと」

「え？」

「ねえ、ますます気になつてきた、誰よ男子の方だけでいいから教えてよ」

「そつか、私月裏君が好きなんだ」

美沙の事を完璧に無視している。

「ねえ、ちょっと聞いて」

ガチャン！

完璧に自分の世界に入っている空は電話を切った。

第六話

次の日、僕は美菜に引きずられて登校した。

「待つて、まだ心の準備が」

「暴れないで！昨日言つたことをそのまま言えばそれで終わりよ」「でも、どんな顔して海さんと会うんだよ」

「いつも通りでいいの」

そんな会話をしている内に教室に着いた。

「いい？教室に入つても普通にしてるのよ？普通に」と言つて、ドアを開けた。

そして僕を突き飛ばして無理矢理教室に入れた。

倒れそうになつたのをなんとか踏ん張つて顔をあげると、そこに海さんがいた。

ボンッ、僕と海さんの顔が真つ赤になり、湯気が出ている。

「あ、あの、お、おはよつ、『じぞ、います、つ、月、月裏君』

「う、うん、お、おはよつ、…つ、海さん」

何かあつたのはバレバレである。

まわりでヒソヒソと話す声が聞こえる。

「ねえ、海さんと月裏君何があつたのかな？」

「どう見ても何かあつただろ、見ろよ、湯気たつてるぜ」

みんなにバレてるのが本人にも分かつた様で一人ともあうあう言つて困っていた。

「ねえ、もしかして昨日言つてた男子と女子つて」

「違うよ、海さんと月裏君じやないよ」

慌てて否定する。

「は？何言つてんの？いぬがみ狗神もぎと茂紀のことじやないの？昨日はそりじやなかつたのに何かイチャイチャしてゐし」

確かにドアの付近にいる人間を差し置き、窓側の席でイチャイチャしている狗神と茂紀がいた。

「あ、そうみたいだね。狗神君と茂紀さん付き合って始めたみたいだね」

「ま、美咲と月裏に何かあつたのは分かつたけどまさか告白してるのは、それに空が好きなのがまさか月裏だったとはねえ」

「いや、それは」

違うと言おうと思った。

しかしそれは美沙が許さない。

「違わないでしょ？ 違わないから美咲と月裏の話が出たんでしょう？」

「……」

言いわけ出来ない。

「ま、頑張んな、空なら絶対につましくいくよ」

「上手く、ね」

もし月裏君が海さんのこと好きじゃなくとも天上さんのことが好きかも知れない。

そう思うと不安な気持ちは消えなかつた。

いつまでもあうあう言つていてもしうがない、と思いつく僕は

「あの、昨日のことなんだけど、放課後に」

と言つた。

海さんは

「わ、分かりました、それじゃ」

と言つて行つてしまつた。

「昨日のことって何かな？」

「さあ？ テートでもして告られたんじゃん？」

このクラスは白夜と海、空をのぞくと大体の奴が勘が鋭いよつだ。

「バレちゃつてるみたいだけいいの？」

美菜が聞く。

「……なんでみんなこんなに勘がいいんだよ」

と僕は嘆く。

「白夜が鈍いだけよ」

と冷たく言われてしまった。

第七話

放課後になり、みんなが帰らない。

朝の話を聞いていた奴等が興味津々といつよつに残っている。
仕方なく僕が教室を出ると海さんが教室にいないのを確認し僕の後
を追う。

どうしてみんなこんなに人の恋愛などを気にするのだ？
ちなみに僕は今図書室に向かっている。

しかし海さんが待っているわけではない。

ただ後ろの野次馬をまくためだ。

図書室にはたくさんの本棚がある。

それは身を隠すのにもいている。

と追いかけて来る奴等を無視して図書室に入るとすぐに奥の棚に向
かつた。

そこで、棚を影にして逃げる予定だったのだが、しかし、

「きやつ」

そこに海さんがいてぶつかってしまった。

「危ない」

倒れそうになつた海さんを腕を掴んで引き寄せた。

強く引っ張り過ぎて僕も一緒に倒れてしまった。

そこに僕を追つてきたクラスの奴等が走りこんで来た。

状況説明。

誰もいない図書室の奥。

重なりあう男女の身体。

間違いなく勘違いされている。

追つてきたクラスの奴等が僕達を見て硬直している。

海さんはみんなの視線に気付き、

「きやつ」

などと言つて僕から離れた。

それじゃあ、なんかいやらしい事をしてたみたいに見えちゃう感じやん。

案の定みんな顔を赤くして声を揃えて

「「「こんなところで、何してんだ、テメHらーーー！」」「

と叫んだ。

図書室にいた関係のない人達は注意しよつにも、クラスの奴等の怒氣に触れそうでためらつてこる。

「おい、月裏、テメエこんなところで海さんと何してた！女の子に興味なさそうな面しゃがつて、実は興味津々かー？羞恥プレイですか？彼女の中は温かかったのか？どうなんだよ、月裏あああああ」と男子は僕の胸倉を掴む。僕は懶らしく肩を竦め、胸倉を離す。

「海さんは月裏君と付き合つてたのか付き合つてたもんなどこでなんて駄目だよ」

と女子は海さんを説得（？）してこる。

海さんはキヨトンとしている。

僕が言い訳しても意味がないし、勘違いが拡大する可能性がある、だから、僕がとるべき行動は…。

僕は海さんの手を握り、

「逃げるよ」

と声をかけ、走る。

海さんは一瞬びっくりしたようだが僕が走り出したのを見て即座に反応して一緒に走つて来てくれた。

僕は海さんの手を握り走る。

あれから、クラスの奴等が追いかけてきたがどうにかまくことが出来た僕と海さんは屋上に来た。

「あの、手」

海さんの手を握ったままにしていた。

「い、ごめん！」

慌てて手を放す。

少し沈黙が続き耐えきれなくなつた僕が話し始めた。

「あの、昨日のことなんだけど…」

第八話

「あの、昨日のことなんだけど…、僕、その、好きな人一人に決め
れなくて、海さんのことは好きなんだけど、その、僕が誰かと付き
合えるほどしつかりしてないから、だから、待つて欲しいんだ、
僕が誰か一人に決められたら、もう一度返事したいんだ」

「…それって、ずるい、私はキープしてもしいらくなつたら、ほ
い、ですか？」

「いや、そういう事じゃなくて」

「分かつてますよ、意地悪なこと言つてゐのち、でも、今私と付き
合えるか聞きたいんです」

「…」

それは、どうなのだろう、付き合おうと思えば付き合える、けビヤ
は美菜を、涼杉さんを好きじゃいけない。

そして何より海さんを傷つける。

だから、

「ごめん、今海さんは付き合えない」

僕ははつきりと言つた。

「…そう、ですか」

海さんは泣き出す。

僕は海さんを抱き寄せる。

「ごめん、ごめんね」

「謝らないで、惨めになるだけだから、謝らないで」

海さんは泣き続けた。

泣きやんだ、海さんは、

「私、諦めませんから、絶対、負けません、誰よりも月裏君にアプ
ローチしていくますから」と言つて去つて行つた。

「これまた大変だ」

僕は空を見ながら言った。

家に帰ると美菜が玄関で待っていた。

「お帰り、白夜」

と普通に言った。

「ただいま」

と僕も普通に言った。

「それで、どうなったの？」

どうなったの？とは多分告白の返事のことだろう。

「うん…、断つたよ、でも、諦めないって言われた」

少しどう答えるか迷い、こう答えた。

「やう、でも、私も負けないわ」

と少し嬉しそうに、楽しそうに言った。

「じゃ、ご飯にしてしよう」

と言つてリビングに入つて言った。

「つして僕の告白騒動は終わった。

次の日、朝教室に入るとみんながいつせいに僕を見た。秋羅が近付いて来て肩に手をまわす。

「白夜君、ちょっとこっちに来てくれないかな？」

何か怒つているようだ。

「何怒つてんだよ」

「怒つてねえよ~、たださ親友にも海と何があつたか話さないわけ？」

「それはどうなのかな？絶交宣言っ！」

海さんとのことでかなり怒つているらしく。

そういえば、ちょっと前に海さんのこと好きだとか言つてたような

…。

「ん？どうした？なんかあつたのか？言つてみ？」

「あつと、その、これは個人情報保護法に引っ掛かるから話せない

「そんな物知るか！話せ話せ話せえ！」

胸倉を掴んでガクガクとふる。

「話す、話すから、話すから放せ」

と言つと手を放した。

手が放れた瞬間逃げるように（いや実際逃げるんだが）教室から出ようとしたのだが、ドアを開けたところにタイミング悪く、海さんがいた。

海さんは僕を見て顔を赤くして

「あ、お、おはよう」ざこます」と言つた。

「あ、うん、お、おはよつ」と言つた。

「その、昨日のことは内緒にお願いします、美菜さんだけには言つても構いませんから」

「内緒ね…分かつた」

「白夜君、昨日の事つて何の事だこの野郎！あれか、十八歳以下閲覧禁止か？」

だんだんウザくなつて来た。

「ウザい消える、お前には関係ないだろ」

僕がそう言つと海さんも

「そうです、秋羅君には関係ないです」

と同意した。

ガーンと言つ効果音が似合つほど落ち込み何処かに行つてしまつた。

「あの、円裏君、こ、今度の日曜日暇ですか？」

秋羅が消えてから海さんが聞いて來た。

「え？ 暇だけどなんで？」

「その、一緒に映画を見に行きませんか

そういう事か、昨日の宣言通りアプローチして來た。

「迷惑でしたか？」

「いや、そんなことは

「じゃ、行きましょーうか」

…何か海さん強くなつた気がする。

「それじゃ、後でメールします」

「メアド知ってるの?」

「…知りませんでした」

海さんとメアドを交換して先生が入つて来てホームルームを始めた。

昼休み僕は屋上で秋羅を含む男子多数に囲まれていた。

「月裏、海さんとの関係を全て話して貰おうか」

顔が引きつりながら言つ。

「関係つて何さ」

「何があつたか、何をしたか、どうしてそつなつたかを包み隠さず
言え!」

「こは嘘をついて誤魔化した方がいいだろ?」

「実は…僕、海さんと付き合つてるんだ」

「…」

…黙つひやつたよ。

その先はどうでも良くなつたのか、もつ聞きたくないのか某ゲーム
に出てくるゾンビの様に屋上から降りて行く。

第九話

空は毎休みは大抵屋上に行き一人でご飯を食べる。
けれど今日はそうはいかなかつた。

男子が沢山いた。

その中に白夜の姿を見つけた。
何か話しているのが聞こえた。

「月裏、海さんとの関係を全て話して貰おうか」
月裏君に質問しているようだ。

「関係って何さ」

白夜は誤魔化した。

「何があつたか、何をしたか、どうしてそうなつたかをすべて包み隠さず言え！」

男子のリーダー的な人がそう怒鳴つた。

確かに月裏君と海さんの関係は気になるけど……聞きたくない、もしも月裏君と海さんが付き合つてたら、私は……。

「実は……僕、海さんと付き合つてるんだ」

場が氷つく。

男達はショックが隠せずその後の話も聞かず、屋上から出て來た。
空は扉のすぐ横に居たのだが皆ショックで周りの様子など目に写らない様だ。

少しの間そこから動けずにいる。
そして決心を決めて屋上に出る。

男子連中が消えてから空を眺めていると、後ろから、

「月裏君」

と声をかけられた。

驚いて振り向いてみれば涼杉さんがいた。

「……さつき、聞いたんだけど、海さんと付き合つてるの？」

「…じゃ、海さんと付き合つてゐるわけじゃないよ。ただアイツ等が
ウザかつたから変につきまとわれても嫌だから言つただけ
だ」とした。「

「…いや、海さんと付き合つてゐるわけじゃないよ。ただアイツ等が
ウザかつたから変につきまとわれても嫌だから言つただけ
だ」とした。「

更に涼杉さんは聞いて来る。

「本当だよ。今嘘ついてもしようがないでしょ？」

「じゃあ、私が月裏君と付き合つてみたいって言つてもいいのね？」

海は白夜に弁当を作つて来ていた。

しかし昼休みになつてすぐ、男子複数名により、拉致（？）された。
少し白夜を探してみると、白夜を拉致（？）した男子達が屋上から
降りて来て、海を見て泣きながらせつて行った。

月裏君がいない？

男子と一緒に戻つて来るだらうと思つて待つっていたのだが白夜が降り
てこない。

どうしたんだね？、まさか乱暴されたんじや。

急いで階段を駆け上がる。

ドアを開けようとすると話声が聞こえて来た。

「……わつわ、聞こちやつたんだけど、海さんと付き合つてゐるの？.
わつわと語つのは男子と月裏君の会話の事だらうか？」

「…いや、海さんと付き合つてゐるわけじゃないよ。ただアイツ等が
ウザかつたから変につきまとわれても嫌だから言つただけ
「本当に？」

更に涼杉さんは聞いている。

「本当だよ。今嘘ついてもしようがないでしょ？」

「じゃあ、私が月裏君と付き合つてみたいって言つてもいいのね？」

パンッ。

凄まじい音でドアが開いて海さんが入つて來た。

「駄目です！月裏君は私と付き合つてますから、駄目なんです」

海さんが叫んだ。

突然入つて來た海さんに面を食らつた涼杉さんが言つた。

「月裏君、海さんと付き合つてゐるわ」

「……」

涼杉の中で僕と海さんが付き合つてゐる事が肯定された。

「あ、違う違う、月裏君は海さんと付き合つてゐるの？って言つたの、突然で間違えちゃつた」

説明しちやつた。

言い直されれば氣付くけど。

「僕と海さんは付き合つてな」

「付き合つてます！」

僕がないと言おつとしたのを書き消した。

「今は月裏君に聞いてるの」

「月裏君が答える必要はありません、私と月裏君と付き合つてます」

海さんと涼杉さんの間で火花が散る。

「海さん」

僕は海さんに呼び掛ける。

「今海さんがやつてることはフュアじゃない、だから、本当のこと
を言おう？」

優しく言う。

「……」

しばらくムスッとした顔をしていたが、最後には

「確かに私と月裏君は付き合つてませんでも……」

胸をはつて言つた。

「負けませんから」

それに対して涼杉さんは

「私、だつて負けないわ」

と
ま
つ
た

第十話

海さんが涼杉さんに戦線布告（？）した翌日。

「月裏君」

涼杉さんに声をかけられた。

「何？」

「今週の日曜日映画を見に行かない？」

デートのお誘いでした。

「えっと、今週は海さんと映画を見に行くことになつて、海さんの名前が出た瞬間にピキッといつ効果音が似合つぽんじ涼杉さんの顔が引きつる。

「そう、海さんとね……だつたら月裏君は私とも映画を見に行つてくれるわよね？」

？よりも怒りマークが似合つぽい方で言った。

「え、その……」

「何？ 海さんは行けて私は行けないと？」
行くことを強制する言い方だ。

「行つてくれるわよね？」

「……はい」

こつこつして来週の日曜日の予定も決まった。

そして日曜日が来た。

見る映画は海さんと映画館であつたその時に決めていた。

約束の時間十分前に映画館に着いた。

海さんはまだ来ていない様だ。

そして約束の時間五分前になつた頃、海さんが來た。

「ごめんなさい、誘つておいて待たせちゃうなんて」

「いや、僕も今來た所だから気にしないで」

「それで今日は何を見る？」

「は、はい、良ければ『出会いの春』と言つ映画を見たいのですが

『出会いの春』とは最近話題になつてゐる、恋愛映画の一つだ。

「うん、それじゃ、それにしようつか

と言つて僕達は映画館に入つた。

「…

映画が終わつて涙ぐむ一人が映画館から出て來た。

「晶さんがあそこで亡くなつてしまふなんて」

「取り残された春菜さんがまた健氣で、映画のシーンを思い出しました涙ぐむ一人。

泣く事十分。

「それじゃ、これで、今日はありがとうございました」

「うん、僕も楽しかつたよそれじゃ」

と言つて別れた。

次の週の日曜日。

「白夜、今日どうか行こうよ~」

美菜が暇でしょがないと言つ風に寄り掛かつてくる。

「『めん、今日は涼杉さんと映画を見る約束があるから』

美菜は不機嫌そうに言つ。

「映画？こないだも見に行つてたじゃない？」

「この間は海さんとで」

「涼杉？海？誰よそれ？」

美菜の目が細くなる。

「誰つて、同じクラスでだよ？」

「私クラスの人の名前白夜以外知らないから

ふてくされた様子で言つ。

「早く覚えてあげなよ」

「来週は誰と行くの？」

僕の言葉を完全に無視する。

「来週は別に誰とも約束してないけど」

「じゃあ、私とデートしよつ」

海さんや涼杉さんに対抗する様に叫ぶ。

「…分かつた、でも何するの？」

「映画見に行ひつ」

「…」

三周連続で映画ですか？

「いや、ちょっと三周連続で映画は」

「…ふ〜ん、海や涼杉とは行けて私は行けないと？」

「…」

涼杉さんと映画を見に行く約束をさせられた時に似ている有無を言わせない言い方だ。

「…分かつたよ」

ため息をつきながら叫ぶ。

「やつた！」

「…つしてまた来週の予定が決定した。

あの後嬉しそうに鼻歌を歌っていた美菜に

「じゃ、行ってくるから」

と言って家を出た。

「あ、こら、白夜！待ちなさい」

出て行つた僕に気付いて美菜が叫ぶ。

「これ以上待つてたら涼杉さん待たせちゃうから話はまた後でな」と言って全速力で走る。

全速力で走つたので何とか時間には間に合つた。
「ふ〜、一応約束の時間には間に合つたけど、涼杉さんはどこかな
？」

涼杉さんを探して周りを見渡す。

「あ、いた」

「なあ、いいじゃねえか、彼女?」

「俺らと遊ぼうぜ?」

男二人に言い寄られていた。

「だから、さつきから言つてるでしょ?人を待つての」

「さつきから待つてのけど来る気配が無いじゃん」

男の一人が言つ。

「まだ約束の時間じゃない」

と言つてはる。

「いいから行こうぜ」

と男が涼杉さんの腕を掴む。

「涼杉さん!」

やばい、と思つた僕は涼杉さんに駆け寄つた。

「なんだ?」のチビ

僕を見下ろして言つ。

「ほら、ちゃんと来たんだから手放しなさいよ」

涼杉さんが苛立つた様に言つ。

「お前が待つてたのってこれ?」

「見るからに弱そうだな、彼女お?ここにつけじや守つて貰え無いぜ?」

こんな風になあ

わざとらしく涼杉さんの腕を引く。

「痛つ

涼杉さんが小さな悲鳴をあげる。

「放せよ」

男二人が誰の声だと言つ風に周りを見回す。

「放せつて言つてんだよ?聞こえねえか?」

よつやく誰が話しているのか分かつたよつて少しひっくりした田で
僕を見る。

少しして

「放せよつて言つたかよ？」

男は今にも笑い出しそうになりながら言ひ。

「耳がわるいの？難聴？」

僕の言い方が気に食わなかつた様で笑顔が消える。

「ちょ、ちょっと、月裏君」

涼杉さんが止めに入る。

「大丈夫、僕は強いから」

二コツと笑つてみせる。

「お前俺等のバツク誰だか分かつてんかよ？」

「鮫叉党だぜ？」

鮫叉党とはこの辺りで有名な族だ。

「へえ、鮫叉党ねえ、頭誰か知つてる？」

白夜が聞く。

「はあ？決まつてんだろ鮫富さんだよ」

「いや、鮫富さんは頭じやねえよ、なんか、本当は違う奴が頭なん
だが変わりにやつてるらしいぜ」

二人がそんなことを話している。

本来は誰が頭なのか知らないらしい。

「実はその頭が僕」

笑つて言う。

「……はあ？テメエみたいな餓鬼が鮫叉党の頭だあ？」

「ふかしこくならもつとましなこと言えよ」

ありえないと笑う。

僕は携帯を取り出して電話をかける。

「あ、鮫富？ご無沙汰、あのさ、ちょっとチンピラにからまれちゃ
つたんだけど助けてくんない？映画館の前にいるから
と言つて電話を切る。

二人が笑うのをやめる。

「さ、鮫富さんのわけねえ！はつたりだろ？」

そこにバイクの音が聞こえて来る。

「ボボボボボボ、少し五月蠅いマフラー音のバイクが止まる。

「ブラックのゼファー750の絞りハン?じょ、冗談だろ?」

バイクに乗っていた男が近寄つて来る。

「パツと見ただけでもテカいと分かる男が白夜の前で止まる。

「お久し振りです、白夜さん」

「おう、どうよ?最近は」

「はい、党はかなりテカくなつて来てます、それよか、白夜さんに絡んでるチンピラは?」

周りをキヨロキヨロとする。

「こいつらだよ」

自分の前にいる男一人を指す。

「こいつら確かウチで面倒見てやつてる奴等です、すんません、白夜さん」

「おお、気にすんな、ちゃんと仕付けとけよ?それからテメエらよお」

二人はビクツとして震えだした。

「ナンパをすんなとは言わねえ、でもよお、人の女に手え出すなよ?分かつたんかよ?テメエら」

二人は黙つてうなづく。

「鮫宮、これからも党のこと頼むぜ?」

それだけ言うと白夜は涼杉を連れて映画館に入つて行く。

第十一話

僕と涼杉さんが映画館に入ると涼杉さんが僕に言った。

「月裏君つて本当に暴走族の総長なの？」

「あの話は本当だよ」

今度は笑わずに言つ。

「なんで月裏君が暴走族の総長に？」

「親が死んだ後僕は喧嘩ばかりしてた時期があつたんだ、その時に色々あつて暴走族の総長になった」「ぼかしたのは言いたくなかったからだ。

「みんなには知られたくないから黙つてね？」
といつもの僕に戻つて言つ。

「…分かつた」

涼杉さんは少し迷つた様だつたが約束してくれた。
雰囲気を変えようと笑顔で、

「で、なんの映画みようか？」

と聞いた。

「…『出会いの春』でどう？」

涼杉さんは少し迷つてそう答えた。

「あの、その映画、先週海さんと見たんだけど…」

「…」

涼杉さんの顔が不機嫌そうに歪む。

「…じゃ、じゃあ、『彼女日記』はどう？」

と僕が提案する。

『彼女日記』は海さんと見た『出会いの春』と同じ最近話題になっている恋愛映画だ。

しかし、涼杉さんは

「いや、いじはあえて『出会いの春』を見ましょ？」
と言つた。

「それはちょっと… 一回見たし

「だからこそよ、海さんと見た時より楽しめたから海さんより私の方
が好きと言つ事よ」

と自信を持つて言つた。

「それは強引過ぎだと思つたが…」

「いいから、早く行きましょう」

と言つて涼杉さんはチケットを買いに行つてしまつた。

映画を見終えて出て来ると涼杉さんは涙を流していた。

「うへへ、晶さんが、晶さんがあ～」

と映画のシーンを思い出しよりいつそう泣き出す。

一方、僕の方はやはり一度見てしまつたので、そこまで泣く事が出来なかつた。

泣き止んだ涼杉さんは

「円裏君は意外と感受性が無いのね」と言つた。

「違うよ、一回見て内容が分かつて泣くに泣けないって言つたが…」

「それは単に同じ映画を選んだ私を責めてるの？」

涼杉さんは少し被害妄想がある様だ。

「そうじゃないけど…」

「けど何？」

「ムキになつてゐるよりは自分らしい涼杉さんの方が…その…か、可愛
愛こと思つむ」

「…そう、そうね。今日の私は私らしく無かつた、だから円裏君が
楽しく無かつたのは当然」
何とか誤魔化せた様だ。

「だから、今度は違う映画を見ましょつ
と言つて、映画館に戻つて行つてしまつた。

結局あの後『彼氏日記』を見た。

「彼氏の行動を日記につけてたおかげでビビっているか分かった、て
言つのはちょっと強引よね」

「やうだね、ちょっと強引過ぎるかな」と言ひ。

時計を見るともう夜の八時をまわつていので

「もう遅いから送つてくれ」

と僕が言つと、涼杉さんは

「あら、ありがとう、でも、今日はいいわ、一本も付き合わせちゃ
つてじめんなさいね、それじゃ、また明日学校で
と言つて走つて行つてしまつた。

リビング以外明かりの付いていない家に入る。

「お帰り白夜」

と僕が帰つて来たのが分かつた美奈がリビングから顔をだして言つ
た。

「うん、ただいま」と返した。

「遅かつたね、もう、」飯出來てるよ
と言つてリビングに入つて行つた。

「ふう、」馳走さま

ご飯を食べ終えた僕は食器を台所に持つて行きながら、美菜に言つ
た。

「…ねえ、白夜」

家に帰つて来てから全く話さなかつた美菜が尋ねて来る。

「今日なんで遅くなつたの？」

「え？いや、涼杉さんと映画見てたから」

「それにしても遅いじゃない、六時間以上もやる超大作を見てたわ
けじゃないでしょ？」

「そりゃそうだけど、ただ涼杉さんと一本見ただけだよ」

「私が家で待つてるって知つて？朝の話が途中になっちゃったからご飯食べながら話そうと思つて噛み切りにくいものを入れない様にして待つてたんだよ？」

感情が爆発したのか声量が半端じゃ無かつた。何と謝ればいいのだろ？…謝罪の言葉が見つからない。

「…「ごめん、何て謝ればいいか分からぬけど、僕美菜の気持ちを考えて無かつた…」ごめん」

「もういいよ…白夜は私の事何とも思つてないみたいだし」

美菜は寂しそうに言つた。

「そんな事無いよ、僕は美菜の事…」

「私の事、何？」

「美菜の事、す、好きだから」「顔を真っ赤にしながら言つた。

「本当？」

と涙目で言つ。

「本当だよ」

「なら…キスして」

「そ、それは…」

口籠る。

「じゃあ、嘘なんだ」

とまた涙ぐむ、もう美菜の涙は見たくない。

僕は美菜の肩を抱き。

生まれて初めて女の子とキスをした。

第十一話

昨日はあんな事があつたせいで眠れなかつた。

美菜の方はしつかり眠れた様で朝から上機嫌だ。

「」機嫌だね、美菜

「まあね」

学校に着くとみんなが見ても異常なほど上機嫌に見えたらしい質、「どうしたの？」上機嫌だね

と聞かれて

「それは白夜と私のひ・み・つ」と意味ありげに答えていた。

そのため、この数週間で出来たらしい親衛隊とやらにて白夜は連れて行かれた。

連れて行かれた先は屋上だつた。

「つ～き～う～らく～ん（怒）」

「な、何？」

「お前は海とくつつくんだら？え？なんで美菜たんにまで手出してんだ？あ？」

「手をだしたも何も僕は美菜とは幼馴染みだし、それに…」

美菜の事好きだからと言いかけて止める。

「それに？」

「……僕は美菜と一緒に住んでるから

「……嘘……そうなの…」

知らなかつたらしい。

「手をだすだけにおさまらず、同棲だと…？……」こいつは駄目だ、殺すのがこの世の為だ

ジリジリと近付いて来る彼等の眼には、只僕を殺す…と言つ思いだけがある。

11

やハい、
やハ過ぎる

慌てて周りを見渡すが逃げれる隙間など無いほどの人が迫って来て

どうすんの？俺！

どうすんの？俺！！（某男優の声）

誰の手が僕に届く
というところから始業のチャイムが鳴った

皆の手が止まる。

皆がまわりを見渡し、一旦で会話をする。

皆の手がまた動きだす。

みんな、授業はちゃんと出ようよ、ね？ 美菜は真面目な人が

ノミノリ

そして、壁一面で壁上から注ぎ行った。

た、助かつた。

げんなりとしながら教室に戻ると

用裏遅刻だぞ！」

「ナニヤナ」

と書いて席に着こうとするが、椅子が無かった。

先生

「業の範」が無いことはナシ

椅子が無くなっているなんて初めてだ。

て いる 奴 は い る か ? 「

今朝僕を囮んでいた男子がクスクスと笑っている。

僕はそいつらの方に歩いて行き

「椅子隠したのはお前等?」

と聞く。

「さあ?俺等は知らないよ

ニヤニヤといやらしい笑みで答える。

殴りたい衝動にかられたがなんとか堪えた。

「新しい椅子取つて来ます」

と言つて椅子を取りに行つた。

椅子を取りに物置きになつてゐる教室に向かつてゐると

「白夜~」

と美菜が追つて來た。

「何?」

「あのや、さつきのつてもしかして私のせい?」

と聞いて来る。

「え?違つよ、ただ少しね...」

と屋上での事を思い出し少し苦笑い。

「少し何?」

美菜は心配そうな目で見つめて來る。

そんな目で見られたら、心配事など話せるわけが無い。

「いや、何でもない」

と誤魔化して物置きになつてゐる教室に向かつた。

椅子を引きずらない様にしながら教室に戻ると僕の机に椅子が戻つていた。

誰が戻したかは海さんや涼杉さんが知つてゐるだろ?から問題はないけど、持つて来た椅子はビリしきよ。やはり返しに行くしかない。

しかし今返しに行くと絶対に机を隠される。こうなつたら…。

持つて来た椅子を持つて廊下に出る。

そして教室の中が見える所に隠れる。

すると数人の男子が俺の机に近付き椅子を手に取った。

同時に僕は動き出す。

「ちょっと何してんの？あんた達！その椅子白夜のでしょ？まさかあんた達が白夜の椅子隠してたの！？」

僕が文句を言うよりも早く美菜が怒鳴った。

「み、美菜ちゃん」「」

僕の椅子を持つていた奴等が同時に言つ。

「あんた達どういうつもりよ！白夜があんた達に何かした！？」

美菜は本当に頭にきたらしく、怒鳴り続ける。

「大体何が、美菜ちゃん、つよあんた達何かに名前で呼ばれたく無いっての！私を名前で読んでいい男はお父さんと白夜だけよ！」

男子達の肩は少し震えている、泣いているのかも知れなかつた。

その中の一人がポツリと言つ。

「……なんで？」

「なんで月裏なのさ！あんな奴の何処がいいんだよ！チビだし顔も

良くないし、勉強だつてスポーツだつて出来るつてわけじゃない、
なのになんであいつなんだよ！」

と叫び美菜を睨む。

「あんたには関係ないわ」

と美菜は冷たく言つた。

「おい、ちょっと待てよ！ちゃんと説明しろよ！」

いきなり美菜に掴かかつた。

第十二話

バシッという音が響く。

必死に伸ばした手が美菜に掴かれたとした手を掴んだ。

「…叶田！お前今何をしようとした！」

自分でも恐い位に冷たい声がでた。

「月裏！テメエには関係ねえ！どいてろ！」

僕の手を振り払おうと腕を振った。

「関係ない？関係なくねえよ！お前なんかが美菜に触るな！」

振りほどかれそうになつた手に力をこめる。

腕がミシッと嫌な音をたて、あまりの痛さに顔をしかめた。

「テメエ…」

次の瞬間僕は叶田に頬を殴られた。

僕は机をなぎ倒して床に転がった。

「きや……」

女子が悲鳴をあげる。

僕は殴られた頬を押さえながら叶田を見る。

叶田は

「おい、テメエ殴られても何もしねえのかよ？」

と叫ぶ。

僕は喧嘩なんかして相手が怪我するのも嫌だし、停学にもなりたくない。

黙つて何もしない僕を見てそいつは

「フン、そんなびびりで喧嘩弱くて美菜ちゃんの事守れんのかよ」と見下した様に言った。

僕は叶田に

「今美菜を守る為に割り込んだんだろうが、美菜には触れさせてないんだから守ってるだろ？少なくともお前からは…」

と言い返した。

すると叶田は僕に近付き

「今からお前をブツ殺してから美菜ちゃんを殴つて田を覚まさせる」

と言つて腕を振り上げる。

ドゴッ

と鈍い音がする。

「ガツ、……テメエ、月裏」

僕の拳が叶田の腹に入つていた。

美菜を殴ると言葉に反射的に手がでた。

「ヤリやがったな！ テメエ！」

叫んで叶田が腕を振り上げる。

バシッ

と肌を打つ音がする。

僕は殴られていない。

美菜が叶田の頬をビンタしたのだ。

騒がしかつた教室が静かになる。

誰も口を開かず美菜を見つめる。

少しして美菜が口を開く

「……アンタ、なんで私が白夜を好きになつたかつて聞いたわね。
教えてあげる」

と静かに言つた。

「まず第一に白夜は人に迷惑をかける事をしない、第一に自分に過剰なまでの自信を持つたない、第三に自分を飾らない、アンタ等みたいに女にもてる事しか考えてない奴等とは違う、第四に人を極力傷つけない、暴力にしても言葉にしても、まあ、そのせいで困つてゐる事もあるけどね」

と言つてチラリと僕を見た。

「そしてこれが一番の理由で絶対的な事」

と一回切つて僕を見る。

「白夜が白夜である、といつ事」

色々な意味が入った重いく強い思いの言葉が響く。

「はあ？ 意味わかんねえよ！ 月裏が月裏であるなんて当たり前だろ？ それのどこが一番の理由なんだ？」

と意味の分らない馬鹿（叶田）は叫ぶ。

「……アンタ馬鹿ね……」

美菜が叶田を哀れそうな眼で見る。

「つまり白夜が幼馴染みであつたり、優しい人間であつたり、嫌いな部分が優柔不斷つて事も全て白夜を好きになる理由なの？」

「？」

いまいち理解出来ないと言う顔の奴が数人いた。

そんなのだから彼女の一人もできないのだ。

「例えば私がもう一人いて貴方の幼馴染みだったら同じ私でも白夜を好きになら無いって事」

「幼馴染みになつたとかそんなの偶然でしか無いじゃねえか」

「そういう、偶然つて言うのが、運命つて言うのよ」

運命と言う言葉にたじろぐ。

「まあ、私が言った事も貴方達みたいに外見だけで好きになつてる人間じゃ、わからないかもね」と言つて哀れそうに叶田達を見る。

叶田達はもう何も言わなかつた。

「美菜さん」

昼休みが半分位過ぎた時海が美菜に話しかける。

「アンタ、誰？」

「私、同じクラスの海美咲つて言うんだけど、知らない？」

海と言つ名前が白夜の言つた女の名前と一致した。

海の全身をジロジロと見て

「あんたが海さんね……さつきの馬鹿共とは違つてやせんと私の話が分かる奴の様ね」

と言つた。

「え?」

「何でつて顔してゐるわね、顔を見れば話が分かる奴か分からぬ奴かぐらいわ分かるわ」

馬鹿にしないでと言つ顔で言つ。

「それで何の用?」

と言つて海を見る。

海は拳を握り

「わ、私、負けないから」

と言つた。

「…そ、そしたら友達にならな?」

「え?」

「同じ人を好きになつた者同士仲良く、時にライバルつて事でいい

?」

と美菜はこゝやかに言つた。

「うん」

海は嬉しそうにうなづいた。

同時刻、白夜は空に校舎裏に呼び出されていた。

白夜が屋上に行くとそこにはもう空がいた。

白夜が入つて来るなり空は

「もしかして月裏君、天上さんと付き合つてゐるの?」

と聞つた。

僕は

「いや、付き合つてないよ、付き合つてないんだけどね……」

と口にした。

「付き合ってないけど、何?」

「…キスしちゃつたんだ」

「え? キ、キス?」

「う、うん」

と言つて少し身構える、昨日の海さんへの対抗心を見る限り、田茶苦茶嫉妬深そうだったから、いきなりキスをされる可能性があった。しかし空さんは意外にも何もしてこなかつた。

「何身構えてるの? もしかして、キスされると思つた?」とおかしそうに言つた。

「べ、別に」

恥ずかしくなつて少し冷たい言い方になつた。

「ふうん、本当にしたくないの? キス」

ニヤニヤと笑ひ。

完全にからかわれている。

「じめん、本当は田茶苦茶したいんだ」

「とか言わないの?」

涼杉さん、それはちょっと痛く無いですか?

「本当にいいの?」

「え?」

「本当にしたくないの? キス」

そんないきなり真面目な顔しなくてもいいだろ。ひ。

仕方なしに僕は

「涼杉さんとキスしたくないわけじゃないけど、今は、まだそこまでしていい関係にはなつて無い…と思つ」と言つた。

「ふうん、じゃあ、天上さんはそこまでの関係になつてゐて事? と不機嫌そうな顔で言つた。

「い、いや、どうなんだろうね、僕も分からない」

何故か目を見れない。

「……そっかそっか、分からない。
と言つて屋上から出て行つた。

「分からぬ……か

自分で繰り返してみる。
本当に分からぬのかな?

か

第十四話

新学期が始まつてから一ヶ月と半月がたつた。

今さらになつて先生が委員決めを始めた。

「まず委員長を決めたい、誰か立候補しないか？」

委員長は色々と面倒なので余程の物好きでないと立候補したりは

「私立候補します」

……いた。

余程の物好きの真面目キャラ、涼杉空がいた。

「涼杉か…まあ、お前なら問題ないだろ？」「

と先生は言つて委員長、と書かれた所の下に涼杉と書いた。

「えへ、次は副委員長を決めたい、誰か「立候補する奴はいるか？」

つと言いかける前に

「はい、俺副委員長やります！」

「抜け駆けすんな！俺がやるんだよ！」

「ふざけんな！俺が

俺が、俺がと僕と秋羅以外の男子が立候補した。

秋羅はあくまでも海さん一筋つて事なのだろ？

「五月蠅い！静かにしろ！」

先生が一喝する。

すると渋々とだが静かになつた。

先生は

「涼杉、お前が委員長だからこの中からお前が好きな奴を副委員長に指名しろ」

と言つた。

涼杉さんは

「じゃあ、月裏君にお願いします
キッパリとそう言った。

言い切つた、言い切りましたよ。

立候補していた男子の目が殺意を放ち僕を睨む。

男子達の目はなんでお前なんだよ！と言つている。

この前の屋上の時の事を思い出す。

……やっぱー。

「あ、あの、僕はやりたくな」

断ろうとした僕の声をかき消したのは

「月裏なら他の奴よりマシだろ？ よし、副委員長は月裏に決定だ」と言う先生の声だった。

「よひしきね、月裏君」

と涼杉さんはにこやかに言つた。

僕は美菜の時と同じくまた屋上に拉致られる（皆屋上好きだな）。

「つ～き～う～らく～ん！！！！！」

美菜の時よりも人数が多い。

てか美菜の時にいた奴もいた（美菜一筋じゃねえのかよ！）。

「なんでまたお前？ 何？」これはギャルゲの世界か？ お前はなんかの主人公か！？」

リーダー格の奴が叫ぶ。

「意味分かんないよ、ギャルゲって何さ？」

「恋愛シユミレーションゲームの事だよ」

と誰かが言つた。

「ギャルゲの説明なんてどうでもいい、問題は貴様だ！」

ビツと僕を指差す。

「貴様はこの学校のアイドル三人をはぐらせてプチハーレムでも作る気か！？」

「別に僕はそんな事がしたいんじや」

「じゃあ、どんな事がしたいんだ？」

誰かがそう聞いた瞬間、僕は我慢の限界だった。

「別に僕は何かがしたくて涼杉さん達と一緒にいるんじゃない！」

と怒鳴つた。

続けて

「お前等この間美菜が言つた事全然分かつてないだろ！人に何かし
たといつて理由で近付く奴ほど嫌な奴はないよ！」
と言つた。

周りの皆は少し面食らつてゐる様だった。

「退けよ！」

と言つだけで人が割れた。

僕は屋上を出て行つた。

「白夜」

屋上を下りて来た所で秋羅が僕を呼んだ。
「秋羅、今僕凄く機嫌が悪いんだけど」

と刺のある言い方をする。

「いいから聞けよ

「だから」

後で、と言おうとした時、

「いいから聞け！」

と秋羅は怒鳴つた。

「……」

「お前の海さんや涼杉さんや天上さんへの気持ちはさつき聞かせて
貰つたよ」

聞かれていたとわかると少し恥ずかしい。

「でも、お前も中途半端だ。俺が好きなのは海さんだけだ、お前み
たいに誰が好きか分からないとかぬかしてゐる奴に海さんは任せられ
ない」

秋羅は僕をジッと見つめる。

「勝負だ白夜！お前が誰が好きか決まるのが先か俺が海さんを惚れ
させるのが先か」

と言つた秋羅は心底楽しそうに去つて行つた。

「そつか、秋羅、海さんの事本気なんだ……」

僕は唯々立っていた。

だから僕は屋上に続く階段の下に誰かいりのに気がつかなかつた。
「海さんを手にいれるのは月裏でも鹿賀里木でもない、この俺だ」
そんな事を言つてゐる奴がいる事に…。

「おはよう」

秋羅が宣戦布告した翌朝、通学路で海さんに会つた。

「あ、お、おはよう、海さん」

僕は美菜の顔色を見ながら言つた。

意外にも美菜は

「おはよう、海」

と普通に挨拶した。

「あれ？ 誰の名前も覚えて無いんじゃなかつたっけ？」

「こないだ友達になつたのよ、ね、海」

と海さんに同意を求める。

海さんは

「ええ、美菜さん」

と笑いながら答える。

それに対し美奈は

「まあ、ある一点においてはライバルだけどね」とボソリと言つた。

「え？ 何？」

と僕が聞くと

「なんでもない」

と答えた。

教室について席に着く。

ガラツとドアが開いて誰か入ってきた。

誰かは誰かを探す様にキヨロキヨロと周りを見回す。

そして海さんを見つけると直ぐに海さんに向かつて行つた。

海さんの手を取り
「どうも、海さん」
と言った。

周りの女子が

「あれって兜叉頭さんじゃない？」

「なんで海さんの手を取ってるわけ！許せない！」

と言った。

兜叉頭 真多羅成績優秀、スポーツ万能、顔も格好いいと三拍子そ

ろった奴で、まあ、当然モテる。

告白された回数は涼杉さん同じ位だろう。

つまり涼杉さんと同じ位僕の学校では有名なのだ、女から女へと流れていく優柔不斷さも有名な理由かも知れないが…。まあ、そんなモテる彼が海さんに直々に会いに来たとなつては騒ぎだすのも分からなくない。

兜叉頭はいきなり手を取られてキョトンとしている海さんこ

「俺は貴女が好きです」と言った。

第十五話

「俺は海さんが好きです」「皆のいる前で堂々と告白した。

「兜叉頭さんが告白した」

「海さんに告白した」

皆が睡然としながら言つ。

しばらくして

「う、海さん、兜叉頭さんからの告白なんて断つたら勿体ないよ」「そりだよ、こんなにいい人なかなかいないよー!」

と女子が海さんに言い始めた。

「え、えっと、その…私は」

周りの女子にうろたえる海さん。

こうなると分かつていていたよう二ヤリと兜叉頭が笑う。

少しして二ヤけた顔を真剣な顔に戻して

「どうでしようか? 海さん」と問いかける。

「もちろんOKだよね? 海さん」

「ほら、兜叉頭さんも返事待ってるよ、早く早く」と海さんをせかす。

海さんは

「えっと私はですね…」

となんとか断るうとした所に

「五月蠅いんだよ、馬鹿共!」

と不意に誰か叫んだ。

「鹿賀里木君?」

叫んだのは秋羅だった。

「さっきから聞いてりやあ馬鹿丸出しな事ばっか言いやがって」

「五月蠅いのはどつちよー人の事馬鹿馬鹿つて言つて」

「馬鹿だから馬鹿つて言つてんだよ…」この馬鹿共…

「私達のどこが馬鹿なのよ」

「勿体ないとか勝手にOKだよね、とか言つてる所が馬鹿ぽいんだよ、海さんの気持ちをお前等が勝手に決めんな！お前等は超能力でももつてんのか！そいつの気持ちを決めていいのはそいつだけなんだよ！」

「決め付けてなんて無いわよ…兜叉頭さんに告白されてつるなんて普通ならしないわよ！」

「普通？普通ってなんだ？そんなもんどうつかの馬鹿が言いだした妄言だ！普通なんてもんはその馬鹿が決め付けて作った基準でしかねえ！んなもんに縛られてたら一生そいつの思った通りの生き方しかできねえ！」

僕は今叫んでいる親友が凄く格好良く見える。

「秋羅」

ただ僕はそう呟いた。

「普通なんて言葉に拘束されてたらシマラねえ一生だぜ！天才には変人が多いつて言つがそうじやねえ、普通って言う枠から外れた物の見方をしてるから新しい発見があるし、変人とも呼ばれるだけなんだよ！」

と秋羅は叫んだ。

「つと話がずれたな、それで？海さんはこいつの告白に対してなんて答えるんだ？」

「わ、私は…」

一拍おいて海さんは

「私、他に好きな人がいるんです。兜叉頭さんには悪いけど……ごめんなさい」

と一瞬僕を見て兜叉頭に頭を下げた。

大体はここで終わるのだが兜叉頭、この男は違った。

「ちょ、調子にのるなあ！この俺が、この俺が告白したのにつるだと…？この顔、この頭、この身体、この神に愛された俺を、この世

の中に数億人いる女の中の一人でしかない女が！」この俺をフリュツ

兜叉頭の言葉は最後まで続かなかつた。

僕が兜叉頭の口を押さえ付けたからだ。

「調子にのつてんのはお前だろ？お前だつてこの世の中にいる数億人の中の一人なんだよ、神になんて愛されてねえただの人間なんだよ」

と言つ僕に対して兜叉頭は無理矢理喋る。

「馬鹿め、神に愛されてなればこんなに才能あふれる人間などいふる筈が無い！」

などと言い切つた。

「……いいか？よく聞け勘違いの妄想野郎、神に愛されたら人間なんてちつぽけなもののがけねえだろ？神に愛された奴は人間なんてちつぽけなものにならずに、天使とかになるんじやねえのか？」

「貴様には関係ないだろ！この俺の素晴らしさが分からぬ奴は黙つてろ！」

「確かに関係無いかもしねり、けどな、嫌がつてる女の子を放つては置けないな」

「嫌がつてるだと！俺はただ告白しただけだろ！」

「告つてフラれてで終わつてねえから言つてんだよ、意味分かんない風に逆ギレすんなよ」

淡々と言い返す僕に次第に我慢出来なくなつて来たらしい兜叉頭は拳を振り上げて

「う、五月蠅い！」

と言つ声と共に振り落とした拳を僕は手のひらで受け止める。

「……全く、なんでこの学校はこんなに血の気の多い奴が多いかな、それにしても可哀想な奴だな。言葉で勝てないと分かれば今度は暴力か？弱いなお前」

「何だと？この俺にお前みたいなチビが喧嘩で勝てる?でも？」

兜叉頭は如何にもキレてますと言つ顔で僕を見る。

「別に喧嘩が弱いつて意味じゃねえよ、女子が味方になるのを予想

して皆がいる所でわざわざ告白したり、断られたのに潔く引きもしない、そういう部分が弱いって言ってんだよ」

兜叉頭は苛立った様に

「だから俺の何処が弱いんだよ！…
と叫んだ。

僕は

「お前は心が弱いんだよ
とだけ言った。

「心だと？」

「そう、心だよ、何故フラれた原因が自分ではなく相手だと思う、そんなんは自分の弱さを受け止められない心の弱い奴がやる事なんだよ、それに心の強い奴ならこゝは潔くひいてよりいい男になつて惚れさせるつて考えると思つぞ」

と僕は言つて最後にもつとも、これはある人からの受け売りだけになつと付け足した。

「…………」

兜叉頭は何も言わなくなつて、そのままクラスから出て行つてしまつた。

その日以来兜叉頭の人気は一気に無くなつた。

それはそうだろう、人を馬鹿にしている奴に人気など出る筈がないのだから。

第十六話（前書き）

読んで頂いている皆様、文化祭などで更新が遅れて大変申し訳ありませんでした。

今度文化祭で発表した作品も投稿させて頂きますのでそちらも読んで頂けると嬉しいです。

第十六話

兜叉頭が海さんに告白してからもう一週間たつた。

僕達が一年になつてから初めてのテストが近付いていた。
「この問題なんだけどどうやってやるの？」

と言う声が聞こえて来る。

訊かれ答えるのはやはり涼杉さんだ。

それに便乗する様に

「涼杉さん、ちょっとテスト範囲で分かんない所があつてさ、今日良かつたら、放課後ファミレスとかで教えてくれないかな？飲み物とか奢るからさ」

と言つて一人つきりになろうとする奴も多数いる。

そういう輩に対し涼杉さんは

「どこが分からぬの？教えられる範囲で今教えるわ、放課後は寄り道せずに帰宅するのが校則だから駄目」
と上手くあしらつている様だ。

涼杉さんは帰つてからも猛勉強している事だろう。
そういうえば最近は海さんと美奈が仲がいい様で家で勉強会をしている。

勉強会は大抵話たり、遊んだりになつたりするのだが美奈達は猛勉強している様だ。

そんな状況の美奈の部屋に近付けない僕は自室でそれなりに頑張っている。

放課後になり、帰ろうとする後ろから

「月裏君」「

と呼ばれた。

振り返るとそこには涼杉さんがいた。

「何？涼杉さん」

と聞くと

「月曜からテストでしょ？勉強はしてるのかなって思つて」と言つた。

どうやら僕がしっかり勉強しているか気になつたらしく。だから

「まあまあしてよ」と答えた。

すると涼杉さんは

「まあまあ？そんな感じや駄目じゃない！まあまあの成績で生きていけるほど世の中は甘くなこのよ」

と言つた。

「だったら私が勉強教えるから、よ、良かつたら私の家にこない？」と言つた。

「…………」

そつきの休み時間に自分で言つてた寄り道は駄目つてのはどうなつた。

涼杉さんは

「やつぱり、駄目？」

と涙目になつて言つ。

うわ、卑怯だ、そんな泣きそうな顔で言われたら、断れない。

「……いよいよ

「え？」

涼杉さんは少し信じられない、と言つ顔をしてくる。

「だから、いよいよ涼杉さんの家行くよ

「本当にっ？」

「本当にっ？」

「じゃ、じゃあ、帰る用意して来るからそこで待つてね」と言つて嬉しそうに自分の机に走つて行つた。

涼杉さんの家は僕の家からけつこう遠かつた。

「　」　が私の家

と言われて、見た家は如何にもお金がありそうな家だった。

ドアを開けて

「さあ、どうぞ」

と言わされたので家に上がった。

「空、遅かったな」

リビングに入ると直ぐに声がした。

声のした方を向くと

「んん？誰だそいつ、お前が男家に上げてるところ初めて見たぜ」と言つて僕を見ている背の高い男性が立っていた。

「荒夜兄、来てたの！？」

涼杉さんは苦い顔をしていた。

「おい、お前！空の何なんだ？まさか彼氏とか言わないよな？」

荒夜と呼ばれた男は涼杉さんを無視して僕に詰め寄る。

「僕は涼杉さんの友人です、貴方こそ涼杉さんの何なんですか？」

と聞き返した。

「あのね、月裏君、この人は隣りに住んでる」

と説明を始めた涼杉さんを遮つて

「志摩紫荒夜だ」

と自分で名乗つた。

荒夜さんは単身赴任した涼杉さんのお父さんについて行つた涼杉さんのお母さんに涼杉さんの事を頼まれ、時々、と言つたほぼ毎日様子を見に来てるらしい。

荒夜さんは手をさしだした。

僕はその手を握つた。

荒夜さんはニコリッと笑つて

「空の事よろしくな」

と皿一杯の力で握つてくる。

僕もお返しにと思いつ切り握る。

ふふふ、と怪しい笑いをしながら睨み合ひ。

睨み合いは

「何時まで握手してんの？」

と涼杉さんが言つまで終わらなかつた。

あの握手の後、荒夜さんは涼杉さんに勉強の邪魔だからと半強制的に帰らせられた。

「一人つきりだから、といい雰囲気になる……はずもなく、

「そこは、Xに代入して……」

などと普通に勉強を教わっている。

別に色氣のある事をしているわけでも無いのにやたら心臓がドキンツと鳴く。

確かに涼杉さんからシャンプーだか石鹼だか香水だか分からぬが、良い匂いがする。

だけど匂いだけでこんなにドキドキしているのはなんか変態ぽい。とか言いつつも微妙に涼杉さんに擦り寄つて行つてる。

気分を紛らわす様に

「な、何か暑いね」

と話かけてみる。

涼杉さんは

「そう? 私はそもそも無いけど、窓開けようか?」

と言つて立ち上がる。

涼杉さんが立つたのを見て僕も慌てて立ち上がる。

「ああ、いいよ、僕が開ける」

と手を窓に伸ばす。

同時に伸ばした手が互いの手に触れる。

「

声にならない声が出て二人共手を引っ込める。

手を胸元で抱き締めた姿勢で自然と見つめあつ。

そしてどちらとともになく一人して笑い始める。

「何意識してんだろうね」と僕が笑いかけると

「ね、たかが手が触れたぐらいでね」と笑い返してくれた。

笑いが止むまで待つて

「勉強しようか」と言つた。

「月裏君」

時計の針が十八時四十六分を指した時、突然涼杉さんに呼ばれた。

「な、何？」

いきなりの事だったので少しひくりしながら訊く。

涼杉さんはド緊張といった感じで

「もう晩御飯の時間だね」

と微妙に棒読み気味で言つ。

「あ、そうだね、『ごめん、こんなに遅くまで居座っちゃって、もう帰るから』

と言つて荷物を片付け始めた僕を見て涼杉さんは

「あ、や、違うの、あの、お腹空いて無いかなって思つて」

と焦つた感じでいて更に恥ずかしそうに言つた。

「空いてるけど？」

と僕は質問の用途が分からず素直にそつ答える。

それを聞いた涼杉さんは

「そ、それじゃあ、晩御飯ウチで食べてかない？」

と言つた。

確か美奈は今日は海さんとファミレスで勉強すると言つていたので
ご飯はいらないだろ？

そう考え

「うん、それじゃあ、『駆走になるよ』

と言つと涼杉さんは嬉しそうに笑つた。

第十七話

トントントンとリズムの良い包丁の音が聞こえる。その後一人でリビングに下りた。

二人きりつで食事なんてカップルみたいで嬉しい、などと思いながらリビングのドアを開けると、何故か荒夜さんがソファに座っていた。

リビングに入つて来た僕達に気付いた荒夜さんは

「お？ やつと下りて来たか、腹減つたぞ、んで？ そっちの餓鬼はお帰りかい？」

とこちらを見ながら言った。

涼杉さんは首を横に振り

「月裏君はまだ帰らないよ、ウチで夕食食べて、その後また少し勉強するから」

と答えた。

荒夜さんなら『ああ！？ 食べてから帰る？』と怒りそうな物だったが

「ふうん、そつか」

と意外にもどうでもよさそうな反応をした。

涼杉さんもこの反応は予想外だった様で少し驚いた顔をしてたままで立つていたが、『ご飯を作る為に台所に向かった。

いつまで立つたままでいるわけにもいかないのでテーブルを囲む家族の食事時用である三つのイスの内、最も荒夜さんから遠いイスに座った。

すると荒夜さんはソファから立ち上がり

「んに、俺の近くに座りたくないか？」

と言つて僕の真っ正面にあるイスに腰掛ける。

僕は

「別に」

と答えたが嘘だ。

そう答えた僕を見て、

「お前は空の事が好きなのか？」
と荒夜さんは言った。

「な！？そ、わ

僕は動搖して何も答えられなかつた。
さらに動搖している僕に

「俺は空の事が好きだ。別に顔がいいからじゃねえぞ？性格の方を
見ても空程の女はそとは居ねえ、俺が好きになるのに値する女だ」
と荒夜さんは言つた。

僕は暫く喋れなかつた。

僕が涼杉さんを想う気持ちと荒夜さんが涼杉さんを想う気持ちは重
みが違つた。

荒夜さんは真剣に、僕は学園のアイドルに憧れているだけでファン
の様に、涼杉さんを想つている。

僕は意を決し

「僕は…僕は荒夜さんの様に『本気の好き』では無いと思います、
でも、それでも僕が涼杉さんを好きと言つ事に違いはありません」
と言つた。

荒夜さんは僕を見て

「俺の空を想う気持ちは誰にも負けない、俺よりも空の事を想つて
ない奴に空と付き合つ資格があると思うか？」
と言つた。

僕は

「大切なのはその人の事がどれだけ好きかだけじゃなくて、その人
にとつてどれだけ好きな人かでしょ？ヌルいラブコメじゃ無いんだ
からそんなくだらない事言わないで下さいよ、ドラマの見過ぎです
か？」

と言い返した。

フツと鼻で笑い、荒夜さんは

「その通りだ」

と言つた。

続けて荒夜さんは

「例えどんなに好きでも、それをどう受け取るかはそいつ次第だ。猛烈にアタックしてくる奴をウザいと思うか、情熱的だと思うか、とどのつまり、気持ちを決めるのはそいつだ、誰でも無い自分自身、一から十まで全て自分で決める。人間てのはそういうもんだ」と哲学者みたいな事を言つた。

それを聞いた僕は

「そうですね、僕もそつ思います」

と賛同した。

更に何か言おうと口を開いた荒夜さんは
「『飯出来たよ～、運ぶの手伝つて～』
と言つ涼杉さんの言葉で遮られた。

料理を運び終えて、三人そろつて

「～～～ いただきます」

と言つた。

涼杉さんが作つてくれた料理はかなり美味しそうだった。
何か視線を感じ顔を上げると涼杉さんが僕をじいっと見ていた。
何だろう?と思ひながら、料理を口に運ぶ。

料理を口に入れた瞬間

「美味しい」

と自然に口から出た。

それを聞いた涼杉さんは

「本当!？本当に美味しい？」

と身体を乗り出して訊いて来た。

涼杉さんの予想もしない行動に戸惑いながらも

「う、うん、美味しいよ、本当に」

と僕は笑つて答えた。

涼杉さんはヨツシャーーーと叫び出しそうな勢いでガツツポーズを

した。

「えつと…どうしたの？」

と僕は涼杉さんの行動が何時もの涼杉さんとかけ離れていたので思わず訪ねてしまった。すると涼杉さんは照れたのか顔を真っ赤にして

「いや、ただ美味しいって言って貰えて嬉しかったから…」

と俯いて時々僕の方を上目遣いで見つめながら言った。

そんな涼杉さんの態度に僕も照れてしまい

「そ、そつか」

と顔を赤くした。

…………。

二人の間に沈黙がながれる。

黙っている間もチラチラと相手の様子を伺っている。

「いい雰囲気の所悪いんだが俺がいるのを忘れんなよ？」

いきなり荒夜さんが声を発した。

僕も涼杉さんも荒夜さんの事をすっかり忘れていたので驚いて椅子から転げ落ちそうになる。

「何も椅子から落ちるほど驚く事じゃないだろ、てか今の反応は少し傷付くぞ」

と荒夜さんは少し悲しそうな顔をして言った。

僕はイスに座り直して

「べ、別に忘れてないですよ」

と言ったもののそうでないのは明白だろう。

僕がそう言った後に暫し荒夜さんは黙っていたが、突然

「餓鬼」

と僕に話しかけてきた。

僕は

「僕は餓鬼って名前でも餓鬼って名字でもないです、僕は月裏白夜つて言うんですよ」

と返した。

荒夜さんは

「やうだな、じゃあ月裏白夜君に聞くぜ?」と笑つて言った。
すぐに続きを言つたかと思ったがただ黙つて僕を見る。

よつやく僕の返事を待つてると分かり

「どうぞ」

と続きを話すよつに促した。

荒夜さんはよつやくか見たいな顔をして

「月裏白夜君、お前は空の事が好きなのか?」

と訊いてきた。

第十八話

「月裏白夜君、お前は空の事が好きなのか？」
荒夜さんはさつき答えた質問をわざわざ涼杉さんの前で繰り返した。

僕は

「その質問にはさつき答えたじゃないですか」「と答えたがもう一度聞き返されるのは分かつていた。予想通り

「もう一度言って欲しいんだよ、空のこの前で」と荒夜さんは言つた。

僕は迷つた。

ここで中途半端な気持ちの僕が涼杉さんの事を好きだと言つたら、後々涼杉さんを辛い目にあわせてしまつかもしれない。黙っていた僕に荒夜さんは

「俺は空の事が好きだ」「と躊躇いもなく言つた。

「な！？」

と涼杉さんは驚きの声を上げ、

「冗談…だよね？荒夜兄」

と荒夜さんに確認する様に言つ。すると荒夜さんは、

「いいや、冗談なんかじゃねえよ、分かってるんだろ、空？」「と涼杉さんに問い合わせる。

凶星だったのか涼杉さんは気まずそうな顔で何も言わなかつた。荒夜さんはやれやれ、と言つた感じで頭を左右に振り「んで、月裏白夜君、君は空の事が好きなのか？」と再び僕に問いかける。

「僕は涼杉さんの事が好きです」と僕は答えた。

そして

「でも、涼杉さん以外にも好きな人がいます」と続けた。

荒夜さんは

「空以外に他の好きな人がいるだつて？ そんなんで空が好きだなんてよく言えるな？」

と痛いところを突いてきた。

それでも僕は怯まず

「言えますよ、どの娘に対しても僕は本気ですから」と返す。

涼杉さんは自分の事が好きだと言われた喜びと他にも好きな人がいると言う嫉妬か悲しみの感情がごつちゃまぜになつたのか曖昧な表情をしていた。

一方荒谷さんは

「やっぱ餓鬼つて面白いな」と笑っていた。

その笑みが氣に入らなかつたが僕は何も言わなかつた。

家に帰り、玄関を開けた途端

「お帰り」

と不機嫌そうな美奈が僕を待つていた。

僕が只今と言う前に

「随分遅かつたわね」

と美奈は不機嫌そうな顔のまま言つた。

まずい。

怒つてる。

そりやあ、連絡もしないでこんな時間まで外にいたら当然かも知れないが……

連絡いれればよかつたな。

「どこで何してたのこんな時間まで」

美菜は笑顔で聞いてくるがその笑みがひきつってかなり怖い。

「いや、その……」

何か言おうとして言い淀む。

嘘をつこうと思えばつける。

秋羅と一緒に勉強していた、と言えばいいだけだ。

「実は……涼杉さんの家で勉強教えて貰つてたんだ」

僕は何故か嘘をつかなかつた。

別に美奈だから、と言うわけではない。

ただ自分を真剣に想つてくれる相手に嘘をつきたく無かつた。

自分の誰に向いてるか分からぬ気持ちの答えを待ち、時にはアプローチしてくる娘を騙す事は出来なかつた。

どんなに怒られるとわかっていても……

「そう、またあの女と一緒にいたの」

美奈の声は怒りからか震えていた。

「その、ゴメン、連絡ぐらいすればよかつたよね」

僕が出来るのは美奈にどれだけ怒られようとそれに誤り続けるだけだ。

美奈が拳を握つたが見えた。

叩かれる、そう思ったのに何時までも拳はとんでもこなかつた。

「美奈？」

僕は美奈の顔を覗きこんだ。

「……………！」

衝撃だつた。

美奈は泣いていた。

過去に美奈が泣いた所など見た事の無かつた、家では泣いていたかも知れないが、少なくとも僕が知る限りでは初めてだつた。それだけに衝撃だつた。

有り得ない事に出くわした気分になる。

有り得ないはずが無いのに。

人間ならば誰でも涙するときはある。

でも、僕は美菜が僕の前で泣くなんて思いもしなかった。

「……つあ！」

静かに泣いていた美菜が驚きの声を上げる。

「ごめん、ごめん美菜」

僕は美菜を抱き締めていた。

力の限り、何の気遣いも、何の遠慮もなく、全力で。

……僕は馬鹿だ。

美菜たつて、何時も強いわけじゃない。

どこかで弱さを持っている人間なんだ。

それを……

「ごめんね、美菜」

僕はもう一度美菜に謝る。

「痛い」

美菜はポソリと言った。

あれ？ 僕全力で抱き締めたまんま？

「！」「ごめん！」

慌てて美菜を離す。

美菜は暫く痛そうに腕をさすつていたが、

「ねえ、もう一回抱き締めて

と言つてきた。

「え！ さつきは何て言つた全然意識してなくて、だから、その……」

と僕はやつて美菜を抱き締めた時の事を思い出し動搖する。

「抱き締めてくれないと許さないんだから」

美菜は拗ねたように言つ。

僕は一步ずつ美菜に近づく。

あと三歩、あと二歩、あと一歩。

とうとう、美奈の前に立つ。

緊張でガチガチに身体を固まらせる。

ぎこちない動きで美奈の背に腕を回す。

ギュッと美菜を僕の腕の中に抱く。

……ヤバい、これはヤバいよ、うん。

心臓が飛び出す程になっている。

美菜にも僕のドキドキは伝わっているだろ？。

僕にも美奈の息遣いや心臓の音が聞こえてくる。

「ねえ、白夜」

美菜が突然僕の背に腕を回す。

「え……え！？」

困惑する僕。

美菜は何か言おうとして、

「…………何でもない」

と言ひのをやめ、僕の胸に顔を埋めた。

結局僕達は暫く抱き合っていた。

第十九話

朝が来た。

もう朝とは、夜が明けるのは早いものだ。
日が登り始め部屋の中に光が射し込む。

その光が僕の顔にあたる。

酷い顔だろう。

結局あの後、暫くして美菜を放し、風呂に入つて寝ようとした。
しかし、ベッドに寝そべると何故か美菜と抱き合つて居るシーンが
プレイバックしてきた。

そのせいで全く寝付けず朝まで悶えていた、と言つわけだ。
時間を確認するとまだ五時半位だ。

学校に遅刻しない様に出るには八時位に出れば間に合ひ。
まだ五時半、今から寝ればギリギリ一時間は眠れるだひつ。
無理にでも寝なれば、そう思い布団を頭をまで被る。

『ねえ、白夜』

途端、美菜の声が再生される。

「ふおおおおお」

ベッドの上で悶える。

やつぱり、眠れない！

「お早う」

美菜と登校しているとクラスの男子が挨拶してくれた。

「……お早う」

僕は寝不足のせいで殆ど声も出せず、囁く様になつた。

「お早う」

僕に引き替え美菜は何時も以上の明るさでクラスメート達を驚かせ
ていた。

中には元気すぎる美菜に後退りした人もいた。

「あれはどういう事かな？」

昨日はいい感じだった涼杉さんはどこか機嫌が悪く、僕に笑つているが怒つていると呟う器用な顔をしてきた。

「……」

海さんは海さんで何も言わないけど悲しそうな顔をしている。

僕が悪いのか？

などと考えていると視界が歪み、誰かの悲鳴が聞こえた気がする。

「目覚めた？」

気が付くと目の前に物凄い美人がいた。

「うお！」

驚き、後退り。

どんな男でもいきなり超美人が目の前にいたらデレデレするよりも先に驚くだろう。

……多分。

「結構なご挨拶じゃないか、この私を見て退くとは「ことだま」超美人、もとい保険医の華瀬津かせつ琴靈ことだま先生が僕に言った。

（ま）先生が僕を睨む。

睨んでも綺麗だな……じゃなくて！

「僕何故ここに？」

ベッドから降り、少しフラフラする足元を怪訝に思いながら尋ねる。

「覚えてないのか？ 月裏、あんた教室で倒れてここに鹿賀里木が運んできたのよ、おまけが三人いたけど」

とニヤニヤしながら僕が運ばれてきた経緯を説明してくれた。

三人つて言うと美菜に涼杉さん、それと海さんかな？

そんなことを考えていると華瀬津先生は倒れた原因を教えてくれた。 原因は寝不足だと言う。

「夜、三人が寝かせてくれなかつたのかい？」

と華瀬津先生は再び厭らしく笑う。

寝れなかつたのは美奈のせいだけど、なんとなく言わない方がいい気がしたので何も言わなかつた。

僕の勘は結構当たるのだ。

僕が何も答えないのを見て、

「さて……月裏、もう大丈夫だろ？ 教室に戻りなさい」
授業を受ける様に言われた。

「 「 「 大丈夫だつた！？」」

僕が教室に戻ると授業中にも関わらず、美菜、涼杉さん、海さんの三人が声を揃えて聞いてくる。

そんなに心配しなくともな。

などと思いながら、

「うん、大丈夫だよ、ただの寝不足らしいから」と倒れた原因を説明した。

すると三人は、

「 「 「 よかった」」

とまたも声をあわせて言った。

秋羅も何も言わなかつたがホツとした様だつた。

「保健室まで運んでくれたつて？ ありがとな」

僕は秋羅が保健室に連れて行つてくれた事にお礼を言つた。

秋羅は

「気にはすんな、親友助けんのは当たり前だろ？」

と言つてくれた。

正直、臭いなと思うけど秋羅はやつぱり格好いいなと思つ。僕にはない格好よさを持つ親友を羨ましそうに見ていた。

家に帰ると速攻でベッドにダイブ。

「眠い」

授業中よく耐えたものだと思う。

自分で自分を褒めてやりたかつた。

ノートはまともに取れていません。
今日中に美菜に「おひこせて貰おう。
とりあえず、今は眠り。

「起きて白夜」

美奈の声で目が覚める。

気分がすつきりしていたので結構寝たことが分かる。
時計を確認すると家の定もう七時過ぎだつた。
となると三時間位は眠っていた事になる。

「白夜、もういい飯できてるよ」

美菜はわざわざまで料理をしてましたと言わんばかりにエプロンを着
ていた。

やべ、可愛い…………じゃなくて！

なんか最近ヤバいな僕。

「分かつた、直ぐ行く」

自分の最近のヤバさに落ち込みながらもそう答えた。

「いいやつさあ」

美菜の作ってくれた手料理を全て平らげてから挨拶する。
食器を片付けると、部屋に行き、テスト勉強を始める。
そこへ、

「白夜、私も一緒に勉強してもいい？」
と美奈がドアから顔だけを出し尋ねる。

もしかして、涼杉さんに対抗しているつもりかも知れない。
そうなのだとしたら断ると、『なんであの女とは勉強出来て私とは
出来ないのよー』とキレそうだ。

それに美菜も涼杉さんに負けず劣らずの成績らしい。
勉強を教わるには申し分ない。

「いいよ」

僕はそう答えた。

美菜は部屋に入つて着て僕の隣に座つた。

第二十話

隣に座つた美菜はお風呂上がりのせいかいい匂いがした。
否、隣に座つたせいだろう。

五月病が流行るこの季節。

今年は異常気象なのか異様に暑い。

僕はエコの為にクーラーを使わずに窓を開けていた。
そこから入つてくる風が美菜の匂いを僕の元に運ぶ。
せめて向かい側なら僕が美菜の匂いを気にする事はなかつただろう。
昨日の事を思い出す。

涼杉さんのベッドの匂いも嗅いだが本人から嗅いだ訳じゃない。
しかつり感じた美菜の感触がリプレイされ、心臓が心拍数を上げる。
「ねえ、白夜」

美菜はほんのりと上気した顔で言つ。

色っぽい美菜に顔を向けられると邪な思いが頭を過る。

このまま美菜を自分の物にしたい。そんな黒い感情を押し留め

「何？」

と尋ねる。

美菜は

「私は白夜になら何されてもいいよ」

と言つて僕の肩に頭をのせる。

黒い感情が再び、更に大きくなり僕を襲つ。

「美菜！」

もう駄目だった。

我慢出来ない。

「きやつ！！」

僕は悲鳴を無視して美菜を押し倒し覆い被さる。

驚いた顔をしている美菜に顔を近づけていく。

バクバクと心臓がなつているのが耳に響く。それでもゆっくりと少

しずつ顔を、唇を美菜に近づける。

唇が重なる、と言つ瞬間に涼杉さんと海さんの顔が浮かぶ。

僕の唇は美菜の唇に当たるか当たらなかぐらいの所で止まった。

「…………」めん

僕は謝りながら美菜の上からぞく。

美菜は暫く起き上がりなかつた。

余程驚いたのか、それとも……

「全くもう」

そう言つてようやく美菜は起き上がつた。

「本当に何されても良かつたんだよ？ 白夜になら」

美菜は照れ隠しなのか少し笑いながら言つ。

「じめん、僕…………暴走しちゃつて」

暴走どころではない今のは明らかに強姦だろ？

「全くもう…………」

美菜はもう一度そう言つた。

襲つた事に対してなのかそれとも襲わなかつた事になのかわからないが、僕はもう一度頭を下げた。

「はあ…………」

大きな溜め息を吐きながらベッドに俯けになり考える。

僕はいつたい、誰の事が好きなんだろう。

このままズルズルと流されてあっちに来たりこっちに来たりしていっては美菜や涼杉さんや海さんにも失礼だろう。

結局僕が優柔不断なのが悪いのだが、一人一人魅力が違う分比べるのが困難だ。

明日秋羅に相談してみよ？

「と畜うわけなんだよ」

僕は学校に着くとさつそく秋羅に相談した。

「羨ましい悩みだな」

と秋羅は恨み言を言つてきた。

が、直ぐに

「まあ、話を聞く限りだと天上さんの事が好きっぽく聞こえるけどお前がそう思つてない以上違うのかもな」

とまともに意見してくれる。

「美奈は子供の頃から好きだつたから年期があるんだよ」と僕は言つた。

「恋愛に年期なんか関係ないだろ?」

秋羅は直ぐにそう返してきた。

「いや、でも、好きでいた年月つてのは結構デカイだろ? 例えば秋羅が海さん好きになつてもう一年だろ? その海さんと昨日好きになつたやつがいたとして、どっちが好きかなんていわれたら海さんだろ?」

と僕が言つと

「俺は海さん一筋だ、他に好きな人などできん!」

と秋羅は言い切つた。

そんな秋羅を僕はやつぱり格好いいと思つ。こんなに一途な言葉を嘘以外に使える奴を僕は秋羅以外見たことがない。

優柔不斷な僕とは大違ひだ。

「秋羅ならそうかもね」

と僕は秋羅を尊敬しつつ言つた。

秋羅はフツと笑つた。

そして

「お前はお前なりの答えをだせ、自分の気持ちに正直になれよ。世間体とか普通だとか気にしなくていいから自分がしたいようにしろよ」

と秋羅は言つた。

「自分のしたいように……か

僕はその言葉を心の中でもう一度繰り返した。

僕は結局のところ誰が好きなのだろうか？

涼杉さん？海さん？それとも美奈？

一人一人の顔を思い浮かべる。

誰が好きかと言わると困つてしまつ。

三人が三人とも同じ位に好きなのだ。

優劣など無く完璧なまでに同じなのだ。

だから、だから僕は……

僕は三人を三人共呼び出した。

「話しつて？」

涼杉さんが代表して尋ねてくる。

「うん……僕、誰が好きなのか考えたんだ。美奈なのか海さんのか、それとも涼杉さんなのか……」

大体のことは予想外ついているのだろう。

三人とも大した反応もせず、僕の話を聞いている。

「正直、すごく悩んだ。本当にこの答えでいいのか？こんな答えを美奈達に伝えられるのか、って」

僕は緊張でバクバクとなる心臓の音を聞きながら言つ。

「だけど、この気持ちを伝えないといけない、そうしないと失礼だと思ったから」

僕は膝をつき、頭を下げる。

「ごめん！僕、三人とも同じ位に好きなんだ！僕が誰が特定の人を好きになるまで待つて欲しいんだ」と伝えた。

僕は頭を上げない。

彼女達の言葉を待つ。

「三人が好きなの？それとも三人が同じ位に好きなの？」

涼杉さんが尋ねてくる。

「僕は三人が好きだよ」

僕はなおも頭を下げたまま答える。

すると、三人が何か話し合っている。

そして、

「話しあつた結果、月裏くんが誰か一人に決めるまで私達三人が恋人になると言つことになりました」と言つた。

言われた瞬間僕は顔を上げた。

「いいわね？」

三人の笑顔がそこにはあった。

僕達が恋人になつてもう1ヶ月経つ、三人とも役割を分担して僕につくしてくれた。

幸せだつた。

僕の好きな三人が隣で笑つていてくれることがとても嬉しかつた。放課後は三人と一緒に帰る。

その後、僕の家でみんなで遊ぶ。

それが日常化していた。

「あ、忘れ物した！」

僕が声をあげると三人は僕の方を見る。

「取つてきたら？」

と涼杉さん。

「一緒に行こうか？」

と海さん。

「みんなで行こうよ」

と美奈。

「いや、みんな先に帰つてて、すぐ追い付くから

そう言つて僕は学校の方に走り出す。

三人は待つてゐるつもりなのかそこに立ち止まつていて、角を曲がり、真つ直ぐに進んで行く。

学校が見えてきたと思った瞬間。

鈍い音が僕の頭に響いた。

「

男が叫んでいるようだが何を言っているかわ聞き取れない。
何故僕が?と一瞬思ったが、それはすぐに察しがついた。

学校のアイドル達を三人とも彼女にしているのだ、学校の男子が僕
を襲わないわけがない。

意識が遠のくのを僕は感じていた。

あの日以来、月裏白夜は行方不明になつた。

桜が咲く季節になつた。

しかし、月裏白夜の行方を知るものは誰もいない。

第一十話（後書き）

「僕の好きな人」はこれにて終わりとなります。

こんな作品をここまで読んで頂いた皆様、本当にありがとうございました。

続編となる「俺の好きな人」も見ていただけると嬉しいです。

その内もっと話をちゃんとした完全版を連載したいと思います。

今までありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8733c/>

僕の好きな人

2010年10月10日02時05分発行